

育友会奨励賞 受賞作品紹介

育友会奨励賞受賞作品の中から1作品を紹介します。育友会ホームページにも掲載しています。

断る理由がない 無償の価値

経営学部経営学科3年 石川雄也



はじめに

専修大学育友会の皆様こんにちは。今回の育友会奨励賞で3回目の応募となる経営学部3年の石川雄也です。今年度はCOVID-19の影響で専修大学の講義もオンラインとなり、多くの方が生活スタイルや考え方が変わったのではないかと思います。本記事では、劇的な変化のなかで私が挑戦したことについてお伝えしていきたいと思っています。

1. 環境の変化

2020年3月、7都府県に緊急事態宣言が発令されその勢いは収まらず、4月からほとんどの大学でオンライン授業になったのではないかと思います。私は生田キャンパスの近くで下宿していたが、オンライン授業になることを知った4月に下宿先を解約し、現在も実家がある静岡県富士市に戻っている状況だ。そのような環境の中で、私は2つのことに挑戦をした。1つ目は、小学生を対象に無償でオンライン授業を提供する「#おうち先生」というプロジェクトであり、2つ目は、地元の若者団体に所属し地域活性化を試みる活動をしたことだ。

2. オンライン上で楽しめる居場所づくり

私が活動した「#おうち先生」とは、COVID-19の影響でステイホームしなければいけなかった小学生を対象に「コロナ禍における不安やストレス解消のために、学生（大学生、高校生）がオンライン上（Zoom）で授業を行うことによって、家の中でも楽しめる居場所づくり」を目指したプロジェクトである。

2020年4月7日に静岡県でも緊急事態宣言が発令された。その翌日に#おうち先生が発足し、静岡県富士市の小中学校が休校になった4月9日から夏休み終了の8月23日までの約4ヶ月半オンライン授業を展開し続け、授業実施数は計249回・総受講生徒数は2005人を記録した。

#おうち先生の立ち上げ人は法政大学4年生の地元の先輩である。発足してからすぐに、代表から「一緒に活動しないか」と声がかかり、私は「自分が子供たちのた

めになるのであれば」と参加することを即決した。代表と私の他に東京大学生、慶応義塾大学生、教育学部生など13名の大学生や高校生がメンバーとなり小学生に向けて授業を行った。科目は国語・算数・英語・理科・社会に加え、図画工作や道徳、総合の授業も提供し、月曜日から土曜日まで毎日配信した。

#おうち先生での役割は事務局と先生に分かれており、事務局は保護者への広報や組織のマネジメントを行い、先生は各自で資料を作成し授業を行った。私は初期のころから活動していたこともあり、事務局として授業日程の連絡や組織運営を行い、先生としては図工・社会・総合を担当するなど、事務局と先生の両方の役割を担った。授業といっても#おうち先生本来の目的は、学習能力向上ではなく、コミュニケーションの減少による精神的ストレスや生活習慣の乱れの改善だったため、子供たちが楽しめる場を創ることを第1の目的としていた。私は子供たちが「ワクワク」する授業を心がけていたので、質問するときは生徒の名前を積極的に呼び、全員が参加できるようにスタンプでリアクションしてもらうなどZoomの機能を最大限に活かした。

授業はFacebookの専用ページから誰でも参加可能であり、受講生は静岡県在住の子供だけでなく、全国・海外の様々な子供たちがオンライン上で新しい友好関係を築き、保護者も安心できる環境を整えた。固定時間で授業配信したことで、「前後に勉強時間を設けることができ、精神的に救われた」「先生役の大学生と話すために、早起きを頑張れた」といった感想をいただいた。受講してくれる子供たちの環境は様々で、なかには外国籍児や



↑ Facebook ページで広報



PCと携帯を使って
FacebookとZoom
で生配信

病弱児、障害児や不登校児等、何らかの事情で学校教育を満足に受けられない子供も受講してくれていることを知り、どんな子でも参加できることの配慮を重視した。当初はゴールデンウィークまでの予定だったが、そのような子供たちや保護者からのオンライン授業に対するニーズが極めて高いことを知り、延長することを決めた。

夏休み期間は、授業の他にも様々なことに挑戦を行った。私が小学生だった頃の夏休みの思い出といえば、頑張って早起きをして町内会で集まりラジオ体操をすることだった。しかし、2020年はほとんどの地域でラジオ体操が中止となり、小学生の思い出に残る機会が失ってしまうと考え、「リモートラジオ体操企画」を実施した。富士市ラジオ体操連盟と協働で、ラジオ体操の資格をもった方にパソコンの前で体操してもらい、その様子をZoomとFacebookで生配信を行った。リモートラジオ体操企画は計5回行い、118名参加した。他にも、夏休みの宿題をスムーズに進めるための「オンライン自習室(計12回)」や大学生と一緒に自由研究を行う「オンライン自由研究(計4回)」の実施など、子供たちの思い出に残る企画も樹立した。

#おうち先生の活動は、NHK 静岡や静岡新聞等のメディア特集を受け、若い世代が力を合わせ未曾有の社会課題に向かう姿が映し出され、地域に強い希望を与えた。当団体をモデルケースに、コロナ禍に必須な手法・考え方が波及する効果が期待でき、さらにコロナ終息後におけるデジタル化や、不登校児童・貧困家庭等に必須な「教育の多様化」を推進する上での先進事例になる可能性が

あると感じている。今後も、長期休暇におけるオンライン授業配信を計画している。

おうち先生 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/ou.ti.teacher>



3. 若者が発信する地元の魅力

私は現在「富士山わかもの会議 Ver.2020」(省略:ふじわか)という若者団体に所属している。当団体は、静岡県富士市を拠点に地域活性化を試みる団体であり、「若者が自分なりのいただきを目指し輝く街」をビジョンに掲げ、メンバーが自分の目で見て考え行動することで、市政に影響を与えることをミッションとしている。富士山わかもの会議は元々2017年に発足したが活動を休止しており、2020年3月に新メンバー10人で結成し再始動した。私が参加するきっかけになったのは現在の代表であり高校の同級生からの誘いだった。2020年の3月に「地元を僕たちの力で盛り上げたい」と声がかかり、県外の大学へ進学したことで改めて地元の良さを感じていた私は、即決で「参加したい!」と彼に伝えた。

静岡県富士市と聞き読者の方は何を思い浮かべるだろうか?ほとんどの方が富士山の印象が強いのだろう。富士市は他にも紙工場の街、生シラスやお茶が採取できることで知られており、つけナポリタンというご当地グルメもある。そんな中で、コロナ期間にふじわかが地域活性化として活動したのは、富士市のローカル鉄道「岳南電車」のプロモーションビデオ(PV)制作だった。そして私は、このプロジェクトのリーダーを務めた。

岳南電車とは、岳南電車株式会社が運営しており、静岡県富士市内のJR東海道線「吉原駅」と「岳南江尾駅」

↓富士ニュース

↓岳南朝日新聞

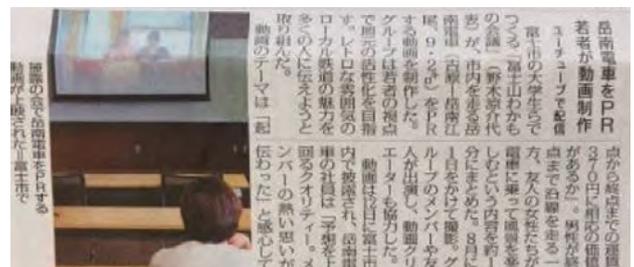


↑静岡新聞



→NHK 静岡

このプロモーション動画を使って
富士市の良さを発信できれば



↑毎日新聞

の全長 9.2km 区間を片道 21 分の直通運転で結ぶローカル電車だ。全駅から富士山が眺められ、工場夜景が日本夜景遺産に認定されているなど魅力がたくさん詰まっている。岳南電車は鉄道マニアにはよく知られている一方、地元民でも利用する人は限られている。その理由として挙げられるのは、路線の全長がたったの 9.2km であり、富士市の東部のみを運行しているため中部や西部に住んでいる人にはあまりゆかりがない。路線沿いに近隣している高校は 2 校あるが、車で送り迎えや自転車通学の学生が大半である。また、始点の吉原駅から終点の岳南江尾駅まで乗ると乗車料金が 370 円かかるため JR 線の料金と比較してしまうと少し高いと感じてしまうのが本音である。それに加え COVID-19 の影響は大きく、休校やテレワークが増えたことにより 4 月、5 月の売上は対前比の 60% 以上減少した。ふじわかではこのような岳南電車の現状点を挙げ、PV を制作することによって、コロナ渦のなか 3 密を避けながらも多くの人に知ってもらうきっかけを創ることができると考えた。

撮影日の 8 月 15 日は猛暑であったが 1 日ばかりで撮影を行った。撮影当日までミーティングをオンライン上で行っていたため、この日に初めて会うメンバーもいた。PV は「高いと感じる乗車料金を出してでも乗る価値がある」をコンセプトに、若者の視点で構成されている。ストーリー内容は、乗車料金が高いと感じた男子学生は終点付近にある目的地のカフェまで走ることを選択する一方、岳南電車に乗車した女子学生は車内から見える風景やローカル電車を楽しむ様子をユーモラスに描いている。PV 完成後には、岳南電車の社員の方々にゲストにお呼びし、会場の人数制限を最大 20 人としながらも対面のイベントを開催した。また、拡散させる目的で報道陣への取材依頼をしたところ NHK 静岡、とびつきり静岡で報道され、静岡新聞、毎日新聞、岳南朝日新聞、富士ニュースに掲載して頂いた。そして地元のラジオ番組ラジオ F にも出演した。これらの反響は想像していた以上に大きく一般財団法人日本青年館から声がかかり、2021 年 1 月 31 日に開催される「全国まちづくり若者サ



↑富士山わかもの会議 Ver.2020 メンバー

ミット」への登壇が決定した。ここまで注目して頂けているのは、自分たちの創造力と実行力でコロナ渦ならではの「オリジナルなまちづくり」を進めることができたからだとは私を感じている。富士市の魅力を伝えるチャンスを活かし、少しでも多くの方が岳南電車に興味をもって富士市を訪れることを期待している。

富士山わかもの会議 Ver.2020 の活動の特徴は、大人の指示で動いているわけでも運営下の主催企業があるわけでもなく、完全に学生が主体となり企画構成やアポイントメントを独自で行っている点である。PV 制作にあたり、まず始めに富士市役所のシティプロモーション課に企画書を提案し、岳南電車株式会社の本社で打ち合わせを行った。また、岳南江尾駅付近にあるカフェハナミズキへ撮影協力をお願いしたところ快く協力して下さった。動画クリエイターとして活動している専修大学の先輩に、私たちの思いを伝えたとこ 賛同してカメラマンとして協力して頂いた。

ふじわかプロジェクトを 1 つのカタチとして残すことができたのは、地域貢献したいと思う私たちの気持ちに寄り添って、支えてくださる方々がいたからだと感じている。感謝の気持ちを忘れず、これからも責任を持った安全な活動とオリジナルで先駆的な新しいまちづくりスタイルの構築をしていながら、若者の自己形成と社会的当事者意識の向上を目指していきたい。

岳南電車プロモーションビデオ

YouTube <https://youtu.be/2lq8xl9uvPw>



4. 活動を通しての学び

私は「#おうち先生」と「富士山わかもの会議 Ver.2020」の活動を通して多くのことを学んだ。

COVID-19 が流行した当初、誰も予想していなかったことの連続で、社会全体に混乱が起こっていただろう。教育機関にもその影響は及び、環境の変化に対応しきれなかったと思う。実際に「学校から課題をもらっただけで特に何もしてくれなかった」と保護者からの声も耳にした。そんな状況のなか#おうち先生は、静岡県富士市の小中学校が休校になった 4 月 9 日から活動を始めた。また、小学生が学校へ通えるようになったときには、参加しやすいように夜の配信へ変更するなど継続的に受講してもらうために工夫を凝らした。活動をこれほどまで本格化することができたのは、組織をマネジメントしてきた事務局の素早い決断力と実行力が兼ね備わっていたからだと思う。また先生役として子供たちと関わってきた学生は、教育とは全く関わりがない人もいれば、教育のことを学んでいても専門家がいないわけではなかった。一度も会ったことがない子供たちにオンライン上で

授業をすることは緊張もあり、初めて挑戦することばかりだったが、うまくいかないことも経験のうちと思ひ活動し、メンバー一人ひとりが自分にできることを力を合わせて活動してきたからこそ、子供たちに必要とされる団体になったのだと感じている。

富士山わかもの会議 Ver.2020 としてプロジェクトを行うのは今回が初めてだった。若者団体が企業や役所の協力の下で行うことは責任が重大であり、撮影時やイベントの企画書を作成するうえで安全面とコロナ対策を徹底的に重視した。何度もミーティングを行い念入りの計画性があったからこそ、協力してくださる方々に信頼してもらい、期待に応えることができたのではないかと思う。

私が活動してきたことは、コロナ期間だからこそ成し得たことである。今年は、例年に比べて行動範囲やできることが限られていたが、その反面これまで思いつかなかったアイデアもあった。対面で会えなくてもリモートで楽しめる場所を提供することや、若者がプロモーションビデオを使って地域貢献するなど、環境や状況が変わっても考え次第で選択肢が増えた。変化に対応していかなければいけないこの時代に、迅速果敢、“Trial and error”、計画性の大切さに身をもって感じる事ができた。経験から得た知識をこれからの日常生活や次なる挑戦へと活かしていきたい。

結びにかえて

出だしでもお伝えしたように、私は今回で3回目の応募となる。なぜ、毎年応募するのかというと、この奨励賞を通して誰かに知ってもらえるきっかけになったら嬉しいと感じているからだ。1回目の奨励賞では、2017年に発生した西日本豪雨の被災地へと復興活動に行き現地の現状を伝えた。2回目は、カンボジアの貧困村へ日本語を教えに行き自分の恵まれた環境に改めて気づかされたことを書いた。そして今回は、環境が著しく変わる中で挑戦したことを紹介した。行動することで、困っている人を助けられることは素晴らしいことだと思う。私の周りにはそのような人が多くいる、その人たちのように影響を与えられる人になっていきたい。

最後になるが、自分がいろんなことに挑戦できているのは、一緒に活動してくれる仲間やそれを応援してくれる方々がいるからだと言っている。周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、挑戦し続けながらも成長することを止めずに、これからも自分ができることで周りの人たちを笑顔にしていきたい。

【参考文献】

<https://www.gakutetsu.jp/company/index.html>

<https://news.yahoo.co.jp/articles/36be2d452f8418c60479aa84eb9f22f19535a64f>